

その 20

アラビア沙漠の

「万葉集」



客為而 物戀敷尔 山下 赤乃曾保船 奥榜所見

「旅にして もの恋しきに 山下(やまもと)の 赤(あけ)のそほ舟 沖に漕ぐ見ゆ」

(旅に出てそぞろ家が恋しい時、先ほど山裾にいた朱塗りの船が、沖の辺りを漕いで行くの見える)

高市黒人(巻3・270)

文化人類学者らしい片倉もとこ先生の最期だった。享年 75。思いがけない、突然の訃報だった。これまでアラビア地域をはじめ、世界各地に移動していったアラビア人を追いかけて、フィールド・ワークに出ていることが多かったもとこ先生は、その後も、「移動」続きだったが、日本に戻りしばらく日文研に「定着」して、移動文化研究の原点「遷宮」の研究にとりかかっていた。しかし、その 2013 年の伊勢神宮正遷宮の年に、先生自身が「現世」から「常世」に移動してしまったのである。

先生は、万葉集には好きな歌はたくさんあるけれど、「移動文化」の研究のため旅をすることが多いので、旅の歌を多く読んだ高市黒人(たけちのくろひと)の歌に共感すると言う。そして、上げた歌がこれである。

「黒人は、たくさん旅の歌を作っていますが、この歌には、本当に旅心が、よく出ています。『赤のそほ舟』が、ついさっきは山裾にあったと思ったら、もう沖の方まで行って、もうすぐ、私の愛する家族がいる都に行くのだな。赤はその頃、魔除けの色だったともいわれるけれど、自分が大事にしている家族たちを守ってほしい、そういう気持ちもあって、『そほ舟』っていただけでもう赤いだけでも、また、『赤』のと言っているところに家族を魔から除けたい、守りたい、そんな気持ちが入っているように感じられます。ところで、私が専門にしているアラビアでは、魔除けの色は、あなた、何色だと思う?」、「……?」、「赤ではなく、青なのですよ」。

そして、この黒人の歌をもとに、もとこ先生は、アラビアの沙漠で、日本に残してきた子どもたちを想う歌を作る。

「旅にして 吾子(あこ)恋しきに アラビアの 青の飛行機 東に飛び行く」

「当時、娘と息子はまだ2つと3つぐらいでしたが、そんな子供たちを母のところに預けて、アラビアの沙漠の中にフィールド・ワークに入っていたのです。そんな時、広い空を、東の方、ふるさとの日本の方に飛んで行く米粒のように小さな飛行機、もう空の青に染まったような飛行機でしたけど、それが日本の方向に飛んで行くのを見て、なんか黒人が家族のことを思ったあの気持と同じだな、なんて思って、この歌を詠みました」。



アラビアの沙漠で、この歌を詠みながら、もとこ先生は思ったという。「万葉集は6世紀の頃に始まって、それが8世紀になって、20巻、4516首にまとめられたのだけれど、ちょうど、同じ6世紀頃、アラビアでは、あの有名な『アラビアン・ナイト～千一夜』の物語が編集され始めて、そして8世紀ぐらいに完成したってことになるのね。シルクロードの向こうとこちらで、まったく時を同じくして、2つの世界的な文学が花開いたってことになるのだけれど、素晴らしいことだと思わない？ただ、『アラビアン・ナイト』ほどには、『万葉集』は海外に知られていないのがとても残念だけだね」。

確かにその通りで、アラビアの物語のタイトルが「千」、万葉の歌集が「万」という符合もまた面白い。そしてもう1つ、万葉の世界とアラブの世界をあたかも結びつけるような話に及んだ。

もとこ先生は、アラビアの沙漠でベドウィンの人々と共に暮らして、長い間フィールド・ワークを重ねてきた中で、日本人の間に、イスラームに関する偏見と無知が蔓延していることを心配していた。マスコミの宿命ともいえるが、えてして、ニュースは、目新しい異常な事件に偏って報道されがちだと言う。イスラーム世界についても日常的なことは取り上げられず、アメリカ同時多発テロ事件や繰り返される自爆テロなど、ごく一部の過激派の起こす暴力的事件が現象的に報道され、受け手は、それがイスラームそのもの、またはその主要な属性だと残酷なイメージを持ち、そう思いこんでしまいやすい。その結果、あたかもそれがイスラームのすべてであるかのごとく拡大誇張され、イスラームへの偏見を増幅していることを危惧していた。アラビアで、イスラームの人々と一緒に暮らし、長く時間を共にして、彼らの優しさや柔和さに触れたもとこ先生の、それが率直な思いだという。

そこで、もとこ先生は、アラビア語の「ラーハ」という言葉を紹介してくれた。「ラーハ」とは、「ゆとり」とか「くつろぎ」という意味だという。そこで、先生は、この「ゆとり」と「くつろぎ」という言葉を、「理屈」抜きで、つまり、それぞれから、「り」と「くつ」を抜いて、1つの語にして「ゆとろぎ」と訳し、「ラーハのすすめ」、つまり「ゆとろぎ文化のすすめ」を提唱してきた。そして、このラーハの心、ゆとろぎの心は、万葉に通じるのでは、として、次のように言う。

「でもね、ラーハのようなものって、万葉の時代にかなりあったのではないかと思うの。私、小さいときから『萬葉集物語』なんて本を読んだりして、万葉時代の人々のことを思って想像してた世界は、そのままアラビアのラーハの世界じゃないかって。ということは、『ゆとろぎ文化』っていう代わりに『万葉文化』って言うてもいいのではないかしら」。

こうして、アラビアの「ラーハ」と万葉の「ゆとろぎ」の世界は、千数百年の時空を超え、海のシルクロードを通じて結ばれたのである。

もとこ先生は、この「ゆとろぎ」という言葉から、さらに「ユトロギスト」という造語を作り、自らの肩書にしている。そこで、著作権者の了解をいただき、私は、10年来「万葉ユトロギスト」という肩書を、名刺に印刷している。



ベドウィンの人々と
(中央がもとこ先生)

ところで、このアラビア語の「ラーハ」という言葉、その語源は、「月明かりの夜の旅」だという。まさに日本の童謡にもある「月の沙漠」だが、その語源から派生して、「ゆとり」とか「くつろぎ」を意味するようになったという。そして、アラビアの沙漠でフィールド・ワークを重ねた時のことを思い出して語る。

「アラブの人々の暮らしは、日が落ちてから、活気に満ちてきます。人々が月を思う気持ちは、私たち日本人が月へ寄せる思いより、もっとずっと強い、と言います。アラビアは、もうお月さまの国みたいな、お月さまの世界みたいなもんですよ。美しい人のことを表現する文句は、あの人はお月さまのようだ、特に十四夜のお月さまのようだって、カマル・アルバターシっていうんですけど。そう言うと、最高のお世辞になるんですね。もうお月さまについての歌とか物語、それからお月さまという名前の女性の話とか、そういうのがずいぶん多いですね。たくさんありますよ」。

そして、アラビアの沙漠で月を見るたびに、この万葉集の歌を思い出すという。

「春日山 おして照らせる この月は 妹(いも)が庭にも さやけかりけり」

(春日山を一面に照らしているこの月は、あの娘の家の庭にも明るく照っているよ)

作者未詳(巻7・1074)

生まれたのは、奈良市だったということは前述した。万葉集には月を詠んだ歌が 180 首余あるように、万葉の人々は、好んで月を詠ったが、生まれ育った家と全く同じ情景を詠んだこの月の歌も大好きだと言う。もとこ先生の生家は、まさにこの歌にある春日山の麓にあった。家には、中庭があって、この歌の通り、青い月の光が庭一杯に照り輝いていたという。先生は、この歌の話をする時、あたかも少女の時代に戻ったかのように語り始めた。

「春日山は私にとってもう、唯一の山みたいなところがあるんです。生まれたのが春日山の麓で、あの青い、濃い青色に沈んだ春日山、そして、そこに煌々と月の光が差して、その情景が世界のどこに行っても、フツと思い出されたりするんです。奈良のお家は、どこも庭がこう中に、そう、中庭があるんですけどね。どこのお庭にも、このお月さまが照らすんだらうなあ。自分の好きな人のお庭にも同じようにお月さまが光を投げかけているんだらうなって、みんな思いますよねえ」。

月の光は、アラビアの沙漠も日本の山々も、そして、現代のビルの谷間も万葉の時代の家の庭も、古から今に至るまで同じように照らしている。

そして何より、春日山の麓で育った幼き頃から、アラビアの沙漠で一人フィールド・ワークに取り組んできたもとこ先生の心の中を、いつも青く煌々と照らし続けてきたようだ。

